

# 『世間施設』の背景

福 田 琢

説一切有部に所属する『世間施設』(Lokaprajñapti)は、須弥山世界説や有情の生態など、仏教の宇宙論・世界観にかかわる主題を総合的に扱ったアビダルマ文献として、つとに知られている。完本としては原典からのチベット訳のみが現存し、その内容解明のための試みも重ねられてきた<sup>1</sup>。筆者も戦前の研究者、加藤清(かとう・せい、1907-1956)の未公開草稿にもとづく文語体(漢文訓読体)和訳を全編にわたって公表し<sup>2</sup>、現在はデルゲ版と北京版を校合した対校テキストの作成を進め、ただいま全9巻のうち第3巻までの作業を終えたところである<sup>3</sup>。また、既発表の和訳を現代語口語体に改めた新訳作成の準備にも取り掛かっている。

これらの作業を順次に公表していく過程で、『世間施設』各章の特徴についても、これまで多少の言及はおこなってきた。しかしテキスト全体にわたる解題と内容梗概は、かつて簡単な口頭発表を行ったまま<sup>4</sup>、文章化もせず放置していた。諸般の事情もあり、ここに遅ればせながらその内容に、若干の増補改訂の手を加えたものを公開したい。

## 1. 仏教宇宙論文献の系譜

改めて述べるまでもないことだが、『世間施設』に描かれる神話的世界観の数々、たとえばメール山(須弥山)を中軸とする円盤状の世界構造や、盛衰興亡を反復する円環的な時間の流れについては、プラーナ文献のようなイ

インド正統派哲学の文献にも一定の共通性をもって説かれるところであり、『世間施設』のそれは、いわば汎インド的コスモロジーの仏教的ヴァリエーションと呼ぶべきものである<sup>5</sup>。仏教の伝統がいつごろからこのようなインド宇宙論の構想を積極的に記述するようになったかは定かでないが、原始仏教から部派分裂を経てアビダルマ教学が生まれ、扱う主題も、煩惱や業や縁起や修行道というごく仏教的なものから、次第に人間や現象世界にかんする様々な分野へと拡大していった過程で、おのずと取り上げられるようになったのであろう。そのような視野から初期の仏教聖典を一覧したとき、仏教宇宙論の発展過程を物語るいくつかの主要な作品が浮かび上がってくる。まずそれら諸テキストを順次に概観して、『世間施設』を生み出すにいたった文献の系譜を一瞥しておきたい。

**【A】西晋 法立・法炬訳『楼炭経』六卷 (T. 23)**

阿含の記述における宇宙論的構想の反映は、すでに『中阿含経』(No. 2「昼度樹経」、No. 8「七日経」、No. 64「天使経」、No. 70「転輪王経」etc.) およびその対応經典などに断片的に散見され<sup>6</sup>、やがてそれらを素材として、インド諸宗教の神話的世界観に対峙しうる仏教コスモロジーの全体像を提示する長編經典が編纂される。これには数種類の異訳があり「世起経類」などと総称されるが<sup>7</sup>、そのうち最も古い訳が『楼炭経』である<sup>8</sup>。全十三品のうちに、須弥山世界の構造、地獄から天に至る諸有情の生態と住居、世界の生成と破滅の過程などが描かれている。

**【B】後秦 仏陀耶舎・竺仏念訳『長阿含経』第四分 No. 30「世記経」(T. 1)**

『長阿含経』の末尾に最終編として収録された「世記経」は、基本的には『楼炭経』の異訳であるが、内容面から見て、底本となったテキストは『楼炭経』よりやや発達した段階のものと考えられている。構成面を見て

### 『世間施設』の背景

も、第3章「転輪王品」と重複の多い第7章「高善土品」を削除し、全十二品としているところに、整理と工夫の跡がみられる。また『楼炭経』では第6章にあたる「龍長品」が第5章に、第12章にあたる「災変品（三災品）」が第10章に配置を変えられているなど、章立てにも手が加えられている。

『長阿含経』所収經典の多くはパーリ長部に対応経をもつが、この經典にはそれが存在しないことなどから、本来は長阿含には含まれておらず、後から加えられたものと見なされている<sup>9</sup>。

#### 【C】 隋 闍那崛多訳『起世経』十卷 (T. 24) / 隋 達磨笈多訳『起世因本经』十卷 (T. 25)

同じく『楼炭経』系經典であるが、この二本は章の構成、文章の細部とも相互によく一致し、まったく同一の原典から訳されたと考えられる。原典は長阿含「世記経」よりもさらに発達した異本であつたらしく、『楼炭経』および『世記経』に較べて記述がかなり詳細になり、分量も増えている。章の構成はほぼ「世記経」と同じで全十二品あるが、「災変品（三災品）」にあたる「世住品」が第12章に配される点だけは「世記経」よりもむしろ『楼炭経』に一致する。

#### 【D】 チベット訳『世間施設』(Otani 5587; Tohoku 4086)

これら世記経類がさらに発展して論のかたちをとったものが『世間施設』であることは、古来の伝承よりも知られる。すなわち『大智度論』巻二に「阿毘曇の六論（六足論？）の第三分は分別世處（世間施設）で、目連の作である」という有説を紹介する箇所、割注が挿入されていて「これは『楼炭経』を論書に改作したものである」と言っている（「有人言。六分阿毘曇中。第三分八品之名分別世處分（此是樓炭経作六分中第三分）是目健

連作』『大智度論』[T. Vol. 25, 70a]。実際、「如是我聞」で始まる伝説形式をとっているなど、注釈的經典のなごりが色濃く、体系的論述という面でも未発達で、ごく初期の論書であろう。作者はインド・チベット伝では目犍連 (Maudgalyāyana)、玄奘伝によれば迦多衍那 (Mahākātyāyana) とされるが、このようにゴータマ・ブッダの直弟子の名を冠する傾向も最初期の有部論書に共通のものである。

【E】真諦訳『立世阿毘曇論』十卷 (T. 1644)

『立世阿毘曇論』の訳出は559年。「論」と名づけられてはいるものの、叙述形式は伝説のかたちをとっており、『世間施設』と同様に初期のアビダルマ論書と考えられる。末尾の終わり方が唐突で、明らかに完訳ではない。

このテキストに説かれる宇宙論体系は幾つかの点で有部のものとは異っており、部派不明とされてきたが、近年の研究(次下の【H】を参照)によって正量部所属という判断が下された。

【F】世親『阿毘達磨俱舍論』第3章世間品

世親 (Vasubandhu, 5世紀) の『俱舍論』(*Abhidharmakośabhāṣya*) は、説一切有部の教義の要点を組織的にまとめて論述した概説書として広く知られている。その構成は「心論系論書」と呼ばれる一連の論書群(『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雑阿毘曇心論』)の延長線上にあるが、それら先行文献と大きく異なる『俱舍論』ならではの特徴のひとつとして、まったく新たに「世間品」と呼ばれる章を設けて、須弥山世界説(器世間)と五道輪廻説(有情世間)にもとづく有部の世界観・宇宙論を組織的に論述した点を挙げるができる。その記述内容はもっぱら『世間施設』に拠っており、実際に『施設論』の名を挙げて本文を引用しているうえ、そ

### 『世間施設』の背景

のような断りが特にない世親自身の釈文 (bhāṣya) においても、記述はしばしば『世間施設』の本文とよく一致する。しかし構成の面では遥かに優れており、いまだ経典註釈的性格が強かった『世間施設』とは比較にならないほど洗練されている。

『俱舎論』以降、その影響を受けて作られた衆賢の『順正理論』『顕宗論』にも同様の章（ただし「世間品」ではなく「縁起品」と題する）は設けられており、記述はしばしばより詳細なものとなっている。とはいえ、全体の構成において『俱舎論』の達成をさらに刷新する域にはいたっておらず、説一切有部における宇宙論・世界観の体系的叙述は『俱舎論』をもって一応の完成を見たと言ってよい<sup>10</sup>。

### 【G】パーリ本『ローカパンチャッティ』(Lokapaññatti)

パーリ本『ローカパンチャッティ』は、その題名から予想されるようなチベット訳『世間施設』の並行資料ではない。またパーリ文献であるにもかかわらず、南方上座仏教の教義を反映するものでもない特異な文献である。本文校訂を出版したウージェニー・デニによれば、これは『立世阿毘曇論』の原本（あるいはきわめて近い系統の異本）を基本素材とし、加えて、パーリ語で現存する六道伽陀経（六種輪廻経）註釈など、類似した内容をもつ幾つかの文献から記述を取り入れて作成されたテキストで、オリジナルはおそらくサンスクリットで書かれていたという<sup>11</sup>。デニはその編纂時期を11世紀から12世紀ごろと見ている。

### 【H】Sarvarakṣita 作 Mahāsaṃvartanīkathā（大いなる帰滅の物語）

世界の生成と破壊（成・住・壊・空）の過程を描いた12世紀の梵語美文詩（Kāyya）作品。NGMPP計画（The Nepal-German Manuscript Preservation Project）によって発見されたネパール写本に含まれる。岡

野潔によってテキスト校訂とドイツ語訳がなされ、日本語への翻訳も順次公開された。岡野によればこのテキストは正量部所属であり、またその宇宙論体系が『立世阿毘曇論』と顕著な類似を示していることから、『立世阿毘曇論』もまた正量部所属（したがって『ローカパンニャッティ』も同じ系統に属する）と推定されるという<sup>12</sup>。

## 2. 『世間施設』と『施設論』（『阿毘達磨大論』）

チベット大蔵経に取められた『世間施設』は、続く『因施設』『業施設』と併せて『施設論』（もしくは『阿毘達磨大論』）と総称されている（Otani 5587～5589; Tohoku 4086～4088）。実際『因施設』最終章の末尾は「阿毘達磨施設論の因施設、第十九章、終わる。因施設が終わり、第二である」（chos mngon pa gdags pa'i bstan bcos rgyu gdags pa las tshigs bcu dgu pa rdzogs so// rgyu gdags pa rdzogs te gnyis pa'o// [Peking. 5587: khu 208a7-b2]）と結ばれており、自らが『阿毘達磨施設論』（*Abhidharmaprajñaptiśāstra*）なる論の「第二」部門であることを述べている。また各章の末尾では「阿毘達磨大論（*Abhidharmamahāśāstra*）の因施設、第……章」（chos mngon pa'i bstan bcos chen po rgyu gdags pa las tshigs …… pa'o [P. 5587: khu 152b2]）という言い方もしており、『施設論』は『阿毘達磨大論』という別名をもっていたことが伺える。続く『業施設』を見ても、各章の末尾では「大阿毘達磨論（*Mahābhidharmasāstra*）中の業施設、第一章」（bstan bcos chen po chos mngon pa las/ las gdags pa tshigs dang po'o// [P. 5587: khu 225a2]）などという同一表記が繰り返されている。この『大阿毘達磨論』（もしくは『阿毘達磨大論』）なる別名は、竺法護・惟浄等による漢訳『施設論』七卷（T. 1538）によっても支持される。漢訳『施設論』は『世間施設』『業施設』を含まず、第二篇『因施設』のみの、しかも部分

## 『世間施設』の背景

訳なのだが、その冒頭に「釈論(?)から判断するに阿毘達磨大論(対法大論)の第一門は世間施設だが、梵文原典にこれを欠く」という趣旨の但し書きをした上で「因施設第二」より始まっているのである(「対法大論中世間施設門第一(按釋論有此門梵本元闕)。對法大論中因施設門第二」[T. Vol. 26, 514a])。

内容的にも、仏教的世界観を説く『世間施設』、仏・菩薩・転輪聖王をはじめ、様々な存在や現象が我々の世界にそのように現れることの因果論的必然を扱う『因施設』、そして有情の輪廻をもたらす善悪の業と果報の分類定義を主題とする『業施設』と、それぞれに関連をもっており、併せて総合的な仏教博物誌を構成する。またさらに、今日は失われた『隨眠施設』や『名色施設』といった他の『施設』が、現存チベット訳の三篇に続いて、かつては存在していたのではないかという指摘もある<sup>13</sup>。

しかしチベット訳『世間施設』のみに限って言えば、卷末においても「世間施設終わる」(jig rten bzhag pa rdzogs so// [P. 5587: khu 118b8])とあるだけで、自らを第一篇とする『阿毘達磨施設論』なる論書の存在を予想させるような記述は見いだされない。また内容的にも『世間施設』に較べて『因施設』『業施設』は後代のものという印象がある。特に第三の『業施設』は、一瞥したところ『世間施設』によく似た、初期の經典註釈書的な外観を装ってはいるが、その組織的な論述は、すでに阿毘達磨論書として一定の段階に達している。

したがって『施設論』は、もとよりこのような三部作(もしくはさらに多くの部門をもつ大部な著作)して構想されたものではなく、まず『楼炭経』あるいは世記経類が発展して『世間施設』と名づけられた論となり、後代になって、それを補完するかたちで『因施設』が、さらには『業施設』が造られていったのであろう<sup>14</sup>。その意味で、『因施設』や『業施設』を考察する場合は、先行論書としての『世間施設』を念頭に置く必要があるが、逆に

『世間施設』を扱う場合、後続文献としての『因施設』や『業施設』の存在はひとまず措いて、これを独立した論書として扱っても特に問題はない。

### 3. チベット訳『世間施設』の概要

チベット訳『世間施設』(*Peking*. 5588, *khu* 1-111b; *sDe dge*. 4086, *yi* 1-93a) は全 9 巻 (*bam po*) より成っており、内容は全 14 章に分かれる。以下に各巻と章の配分、および各章の概要を示しておく。

第 1 巻 (*P.* 1.1; *D.* 1.1) 第 1 章、第 2 章、第 3 章、第 4 章

第 2 巻 (*P.* 13a6; *D.* 11b1) 第 5 章、第 6 章

第 3 巻 (*P.* 23a4; *D.* 20a4) 第 6 章 (承前)、第 7 章

第 4 巻 (*P.* 34a7; *D.* 29b2) 第 7 章 (承前)

第 5 巻 (*P.* 46a6; *D.* 39a6) 第 8 章、第 9 章、第 10 章、第 11 章

第 6 巻 (*P.* 58b2; *D.* 49b3) 第 11 章 (承前)

第 7 巻 (*P.* 71a6; *D.* 59b7) 第 11 章 (承前)、第 12 章

第 8 巻 (*P.* 85b6; *D.* 71b7) 第 13 章、第 14 章

第 9 巻 (*P.* 100a6; *D.* 83b5) 第 14 章 (承前)

#### 第 1 章 世界の構成要素 (*P.* 1.1; *D.* 1.1)

経典引用より始まり、虚空に無数の世界が散在しているが、それぞれの世界が同様にそれぞれの須弥山・三悪趣・四大州などの場処をもち、それぞれの処に人・天・龍・迦楼羅などの有情が棲むことが、まず包括的に述べられる。

#### 第 2 章 須弥山世界の構造 (*P.* 3b5; *D.* 3a7)

色界諸天、欲界諸天、地上世界、地獄の名称を列举し、九有情居と十不



## 『世間施設』の背景

善業の教説を紹介。

### 第3章 有情の生態環境 (P. 6a5; D. 5a7)

諸々の有情生処における飢餓の有無、飲食の有無、排泄の有無、雨の有無といった環境の違い。

### 第4章 有情の経済・民俗・文化 (P. 9a3; D. 7b7)

各有情処における交易の有無、肌色の違い、服飾の違い、結婚生活の有無といった相違点。

### 第5章 気象および有情の生態 (P. 13a5; D. 3a7)

各有情処における気象・親子・主従関係・財産など、日常生活上の相違。

### 第6章 有情の生理・世界および庇護者 (P. 15a7; D. 13a4)

女子の月経と妊娠、男女の交合、有情の寿命、南瞻部州の地誌、人の庇護者たる三十三天など諸天の活動。

### 第7章 三十三天と阿修羅の世界 (P. 27b1; D. 23a7)

阿修羅と三十三天の闘争、三十三天の住居と遊園。

### 第8章 天体の運行をめぐる諸問題 (P. 46b7; D. 39a6)

太陽の運行と昼夜、月の満ち欠け、星辰と天宮。

### 第9章 天体の構造をめぐる諸問題 (P. 49a2; D. 41b6)

月、太陽、星辰の形状とそれぞれの天宮の様子。

### 第10章 物理的問題をめぐる考察 (P. 53a3; D. 44b6)

四大種の解説、季節による昼夜の長短、刹那から須臾にいたる時間単位の解説。

### 第11章 世界の滅亡と生成 (P. 54b1; D. 46b4)

この章はインド仏教コスモロジー文献としての『世間施設』の白眉ともいえる箇所なので、少し詳しく内容紹介をしておきたい。周知のとおりインド仏教の世界観では、宇宙は天文学的な周期で生成発展と衰退滅亡のサイクルを繰り返していると考えられており、ここではその滅亡から再生に

至るプロセスが詳しく解説される。

まず人々の争いや疾病、飢饉などによって、わたしたち輪廻の生存（有情）の寿命が伸び縮みし、小規模の発展と衰退を重ねる様子が描かれる。続いて本格的な世界の衰退がやってくる。はじめに餓鬼・地獄界が消滅する。次に地上世界の生存が次々に瞑想（三昧）に入り、天上世界へと転生する。生命の消え去った世界に七つの太陽が現われ、海水を干上がらせ、地上を焼き尽くし、すべてを灰燼に帰し、虚空が残る。

虚空世界に微風がそよぎ、やがて渦巻き状の激しい気流の輪（風輪）を生成する。その上に雨が降り、雨水は風の力によって凝固し、金の円盤、水の円盤の層を作り出す。これらの層が新たな世界の基盤であり、水の円盤が大海となる。大海の中央、円盤の軸にあたる部分に、この宇宙の中心となるスメール山（須弥山）、およびそれを取り囲む山脈が形成され、さらにスメール山の四方に四つの大陸が現われる。すると天上世界に退避していた生命たちは、再び地上世界へと転生を始め、スメール山南方のジャンブー州（南瞻部州）に生まれ変わる。これが人間世界である。

天上世界から転生したばかりの人間たちは長寿であり、容姿は美しく光輝き、無垢であり、天空を駆けることができるなど様々な超常能力をそなえていたという。しかし創生期の大海の表面に浮かぶ「地味（pṛthvīrasa）」という物質を嘗め、上質の蜂蜜の如きその味に耽溺し、貪るようになって、身体が固く重く不浄となり、飛翔の能力を失う。また季節・年歳、昼・夜の区別といった時間の観念が発生し、年老いることを知る。さらに、食物を食べる量の多少によって、それまでみな等しかった有情の容貌に美醜の個体差が生じ、そこから差別が起こる。やがて地味は食べ尽くされ、有情は代わりに「地皮餅（pṛthviparvaṭaka）」を食し、さらにそれも失われると「林藤（vanalāta）」を摂る、というように、次第に粗大な食物を口にするようになる。同時に道徳倫理も墮落して、諸々の不浄と不善がそな

わり、寿命は縮み、互いに反目しあう。林藤も失うと、有情は米を食べるが、乱獲のために天然米は次第に不足し、土地の境界を定めて各々の田畑を所有するようになる。その結果、他人の土地の米を盗む者が現れ、諍いが起きる。

この諍いを収めるのが伝説の王マハーサンマタ (Mahāsaṃmata, 多敬) である。マハーサンマタは諸田とその所有者たる人民を統治し、争いを鎮め、法と戒とを制定する。つまりこのマハーサンマタこそ人類史上最初の王であり、釈迦族の王統に連なる遙かな祖である。最後に、マハーサンマタに始まりブッダに至る歴代の王位継承者の名を多数にわたって列挙した、二種類の系譜が引用される。

#### 第12章 須弥山および外輪山 (P. 82b2; D. 68b7)

須弥山の形状、高さ、山頂とそこに住する諸天などの詳細な解説、および諸外輪山の構造の説明。

#### 第13章 須弥山世界の構造 (P. 85b7; D. 71b7)

まず、七重の外輪山とその間にある内遊海、四天王の住居と四大州（東勝身州・南瞻部州・西牛貨州・北俱盧州）および八小州と須弥山世界の表層を紹介し、続いては垂直軸に沿って、上は色界諸天から下は八大有情地獄までを概観する。

#### 第14章 地獄 (P. 90b5; D. 76a2)

南瞻部州の地下には、上から順に(1)等活 (Saṃjīva)、(2)黒繩 (Kālasūtra)、(3)衆合 (Saṃghāta)、(4)叫喚 (Raurava)、(5)大叫 (Mahāraurava)、(6)大熱 (Pratāpana)、(7)炎熱 (Tapana)、(8)無間 (Avīci, 阿鼻) の大地獄が階層をなして存在しており、罪業が重い者ほどより深い地獄に墮ちる。また、それら大地獄の東西南北の四方には、それぞれ四つの小地獄 (副地獄) があり、十六小地獄と呼ばれる。これら 八大地獄・十六小地獄の様子が詳細に説明され、最後に典拠が引用される。

以上に見るように、全 14 章からなる各章は長短さまざまで、筆致にもおのずから濃淡がある。前半は器世間をめぐる客観的な記述に終始しており、経典引用から始まり、須弥山世界の諸々の有情の生態やその住居あるいは自然環境が、章節を短く区切ってごく散文的に解説されている。後半に入り、有情世間の解説が中心になると、描写にも独特の迫力が伴ってくる。第 11 章では、宇宙の生成と衰滅の過程が、その内容にふさわしいスケール感をともなって詳細に描かれている。とりわけ、宇宙再生後の人間世界の推移を叙述するなか、長寿で容姿も端麗だった創世期の人間たちが、物質世界に染まって欲望に耽溺し、美醜の差や皮膚の色の違いや身分の差を生じ、土地所有の観念をおこして互いに争うようになっていく過程の描写には、一種の文明批評的視点が感じられる。またその争議を収め、人間社会に法政をもたらす存在として伝説の王マハーサンマタがこの神話世界に召喚され、ひいてはブッダおよびラーフラにいたる王の系譜が導き出され、これを契機に、神話的創世物語から我々の現実につらなる歴史的・時間への橋渡しが行われる点も注目しに値する<sup>15</sup>。

さらに、最後の第 14 章の地獄の解説も、その凄惨な描写で強い印象を残すが、これについてはかつて別に詳しく論じる機会があったので、詳細はそちらに譲りたい<sup>16</sup>。

#### 4. サンスクリット断簡

『世間施設』は、完本としてはチベット訳のみが現存するが、そのほかに 3 種類のサンスクリット写本断簡の存在が知られており、その詳細はジークリンデ・ディーツの報告に的確にまとめられている<sup>17</sup>。いまディーツの成果を借りてこれらの写本の概要を紹介すれば、以下のとおりである。

## 『世間施設』の背景

【A】ギルギット本：現在ウッジアインの Scindia Oriental Museum に保管されているギルギット (Gilgit) 出土資料 No. 4737 中にある、6 葉の樺の樹皮に書かれた写本断簡 (birch-bark manuscript)。このサンスクリット写本は 1950 年代の初頭、インド陸軍の一将校によって、カシュミールのギルギット地方からもたらされたといい、全部で 34 葉 (68 面) よりなる。6 世紀から 10 世紀にかけて用いられたギルギット／パーミヤン Type II (もしくは protośāradā) と呼ばれる書体で記されている。内容は大きく三種類にわかれ、第一群が『法蘊足論』、第二群が『増一阿含経』、そして第三群が『世間施設』の一部であることが判明した。最初にこの写本の研究に着手したデリー大学のセングプタは、そのローマ字転写を公表したが<sup>18</sup>、ディーツ (第三群が『世間施設』の一部であることは、ディーツと松田和信によって明らかにされた) は、そのローマ字転写に不備が多く、写本の順序にも誤りがあることを指摘し、後に正しい配列を示した。

内容は (1) 第 6 章、南瞻部州地誌のうち四大河および香醉山の解説、(2) 第 7 章の三十三天の住居、(3) 第 11 章の末尾 (ただしチベット訳には対応箇所をもたない)、そして (4) 第 12 章の須弥山の解説の冒頭部分に相当する。

これらのうち、(3) チベット訳に対応箇所を欠くという断簡 (5 [1] r, = Sengupta No. 207) については説明が必要だろう。先に触れたとおり、チベット訳第 11 章の末尾は、マハーサンマタ王に始まり、釈尊とその息子ラーフラで終わる諸王の系譜をもって結ばれているのだが、このギルギット梵文断簡はそれに続く部分で、さらにマウリヤ朝の諸王の名前が飛び飛びに列挙されている、というのである<sup>19</sup>。これは、仏教と親和的なかれら実在の諸王を権威づけ、その歴史的正当性を誇示するために付加されたものと思われる<sup>20</sup>。

【B】高貴寺・玉泉寺・四天王寺・知恩寺本：9 世紀に中国からもたらされ、

現在日本の四つの寺院にそれぞれ個別に所蔵されている貝葉。これもギルギット本と同じギルギット／バーミヤン Type II で書かれているが、書体は比較的古いギルギット写本に類似しており、書写時期は6世紀から8世紀ごろ、地域はインド北西部もしくはカシミールで書かれたものが、中国に渡ったと推定される。(1)高貴寺の断片は第11章の世界の衰滅過程を描く箇所、いわゆる七日経の一部にあたり、(2)玉泉寺本は第12章の須弥山世界の描写、(3)四天王寺と知恩寺の写本は第14章、地獄の解説の末尾部分に相当する。これらの断片は松田和信によって詳しく資料比定され、テキストのローマ字校訂および和訳と併せて公表されている<sup>21</sup>。

【C】トゥルフアン本：今世紀初頭にプロイセン王国のトゥルフアン探検隊によって発見され、旧東ベルリンのアカデミーに保存されたコレクションが『トゥルフアン出土梵語写本目録』として11巻まで出版されている<sup>22</sup>。このトゥルフアン・コレクションのうちに含まれる四葉。第1断簡と第3断簡は北トルキスタン Type B のブラーフミー文字で記されており、第2断簡は Type V すなわち北トルキスタン Type A のブラーフミー文字で記されている。どちらの書体も7世紀より使われているものである。(1)第1断簡は第6章、有情の庇護者たる三十三天と四天王、およびその眷属たち、そしてかれらの布薩日における所作についての説明にあたり、(2)第2断簡は第11章、先に見た高貴寺の断片と同じく七日経の一部（高貴寺本よりも少し前の箇所）、(3)第3断簡は第12章、須弥山の構造の説明にそれぞれ相当する。

註

- 1 代表的なものとして、ド・ラ・ヴァレー・プサンの内容紹介 (Louis de la Vallee Poussin, "Vasubandhu et Yasomitra. Troisième chapitre de *Abhidharmakośakārikā*, *Bhāṣya* et *Vyākhyā*, avec une analyse de la *Lokaprajñapti* et de la *Kāraṇaprajñapti* de Maudgalyāyana" *Bouddhisme*:

## 『世間施設』の背景

- Études et Matériaux* (London 1918), pp. 326-350)、木村泰賢「施設足論 (Prajñāptisūtra) の考証」『阿毘達磨論の研究』(丙午出版社、1922年;『木村泰賢全集』第4巻として再刊)、および春日井眞也・山口益「施設論攷」(『小西・高島・前田三教授頌壽記念 東洋學論叢』平楽寺書店、1952年)をはじめとする、春日井眞也の一連の研究があり、それらは春日井眞也『インド仏教文化の研究』(百科苑、1975年)に収められている。
- 2 福田琢「加藤清遺稿 藏文和譯『世間施設』(1)」～「同(7)」『同朋仏教』第34号(1999年)、第35号(1999年)、第36号(2000年)、『同朋大学論叢』第84号(2001年)、第85・86合併号(2002年)、第89号(2004年)、『同朋仏教』第40号(2004年)。
  - 3 福田琢「北京・デルゲ対校 チベット文『施設論』第1巻」～「同 第3巻」『同朋大学論叢』第93号(2009年)、第96号(2012年)、第98号(2014年予定)。
  - 4 福田琢「世間施設について」(東海印度学仏教学会第47回学術大会における口頭発表)2001年7月7日、同朋大学。
  - 5 プラーナ文献の宇宙論と仏教のそれとを対比した概説として、木村泰賢『小乗仏教思想論』(『木村泰賢全集』第5巻、明治書院、1935年)所収の「第三篇 世界観」、定方晟『インド宇宙誌』(春秋社、1985年)などがある。
  - 6 牧達玄「阿含經典中に散在する器世間関係の資料整理(一)」(『印仏研』第27巻2号、1979年)「同(二)」(『印仏研』第29巻2号、1981年)、「同(三)」(『印仏研』第31巻1号、1982年)。
  - 7 これら異訳經典の成立過程を詳細に論じた成果として石川海静「長阿含世記經の成立に就て」(『日本仏教学協会年報』第8号、1936年)がある。および牧達玄「大樓炭經の同本異訳を巡る二三の問題」(『印仏研』第26巻2号、1978年)参照。以下『世起經』類についての論述は、これらの成果に多くを負っている。
  - 8 『大正新修大藏經』では『大樓炭經』と題されているが、「大」の字は宋元民三本からは支持されず、また『出三藏記集』(新集經論録第一および新集異出經論録第二)においても『樓炭經』としてのみ言及されているため、ここでは『樓炭經』とする。また『出三藏記集』[T. Vol. 55, 8c, 9c, 14b]、『歴代三宝記』[T. Vol. 49, 62a-66b]『大唐内典錄』[T. Vol. 55, 233a-237c] などには、かつて西晋・竺法護による『樓炭經』五巻の訳業があったこと、また 法炬の単独訳『樓炭經』も存在したことが記録されている。これら異訳についての詳細は宮嶋純子「隋代訳經『起世經』『起世因本經』にみる同時代異訳經典の成立過程」(『東アジア文化交渉研究』第5号、2012年)参照。なお「樓炭」なる音写語については、古くより lokadhātu や lokotthāna あるいはたんに loka といった原語が推定されているが、定かではない。
  - 9 前田恵學『原始仏教聖典の成立史的研究』(山喜房仏書林、1964年)620頁参照。

- 10 『俱舍論』のサンスクリット原典写本は1935年に発見され、1967年に校訂出版されたが(P. Pradhan ed. *Abhidharmakośabhāṣya*. Tibetan Sanskrit Work Series Vol. VIII, K. P. Jayasval Research Institute, Patna 1967)、「世間品」については、それより以前に、準原典ともいえるチベット訳からの和訳が公刊されている(山口益・舟橋一哉『『俱舍論の原典解明 世間品』法蔵館、1955年)。同書には『俱舍論』本文の和訳およびヤショームトラ(Yaśomitra)の註釈『スプタールター』(U. Wogihara ed. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*. 梵文俱舍論疏刊行会、1932~1936年; 山喜房仏書林より1971年に再刊)のサンスクリットからの和訳を併せて収める。現在、小谷信千代と本庄良文による『俱舍論』「世間品」本文のサンスクリットからの直訳、およびそれに対する、チベット訳で現存する満増(Pūrṇavardhana) 疏の和訳の出版が準備中である。
- 11 Eugène Denis, *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du Bouddhisme ancien*, 2 vols, 1977. その内容については、櫻部建「ローカパンニャッティについて」『パーリ仏教文化研究』(山喜房仏書林、1982年)の紹介に詳しい。
- 12 岡野潔「インド正量部のコスモロジー文献 立世阿毘曇論」(『中央学術研究所紀要』第27号、1998年)。『大いなる帰滅の物語』の内容については岡野潔「インド正量部による世界の歴史—『大いなる帰滅の物語』内容梗概」(『論集』(印度学宗教学会)第38号、2011年)、および「『大いなる帰滅の物語』(Mahāsaṃvartanikathā)第2章1節~3節に見る世界形成の正量部伝承」(『哲学年報』第66輯、2007年)、同「やがて世界が終わる、世界が生まれ変わる—『大いなる帰滅の物語』第4章2節~4節読解—」(『哲学年報』第67輯、2008年)、「生きものが再びいなくなる時代—『大いなる帰滅の物語』第5章1節にみる正量部伝承—」(『哲学年報』第68輯、2009年)、「世界の成り立ちをめぐる外教との論争—『大いなる帰滅の物語』第1章第4節読解—」(『哲学年報』第71輯、2012年)、「Sarvarakṣita 作 Mahāsaṃvartanikathā 校定テキスト(1)」(『哲学年報』第72輯、2013年)を併せて参照。
- 13 木村泰賢「施設足論(Prajñaptiśāstra)の考証」『阿毘達磨論書の研究』(前註1参照)。および本庄良文「『隨眠施設』『名色施設』一有部『施設論』の未知なる要素—」(『印仏研』第47巻1号、1998年)。
- 14 山田龍城『大乘仏教成立論序説』(平楽寺書店、1959年)88頁参照。なお筆者はかつて、総称としての『大阿毘達磨論』なる総称は、おそらく『世間施設』に加えて『因施設』や『業施設』が増広され、一大論書へと発展した段階で与えられたものであろう、と推測したことがある(福田琢『『施設論』『品類足論』の原題について』『長崎法潤博士古稀記念論集 仏教とジャイナ教』2005年、平楽寺書店)。これに対して青原令知は、『衆集経』や『起世経』が、もはや經典の範疇にとどまりえず『集異門足論』や『世間施設』へと発展したとき、いわ



## 『世間施設』の背景

- ば論という新たなジャンルを宣言する意味で、自らを阿毘達磨論と称したのではあるまいか、という考えを述べている。青原令知「『業施設』和訳研究(2) — 第1章第2節～第2章—」(『仏教学研究』第68号、2012年) 註1参照。
- 15 次に触れるように、ギルギットから出土したこの箇所の手抄本の写本には、さらに歴史上の王の系譜が増補されているという。本稿次項の【A】ギルギット本を参照。
  - 16 福田琢「有部論書における地獄」(『東海仏教』第52輯、2007年)。
  - 17 Siglinde Dietz, "A Brief Survey on the Sanskrit Fragments of the Lokaprajñāpti-śāstra" 『大谷大学真宗総合研究所紀要』第7号、1989年。
  - 18 Sudha Sengupta, "Fragments from Buddhist Texts" Ramchandra Pandeya, *Buddhist Studies in India*, Delhi 1975, pp. 195-208.
  - 19 Siglinde Dietz, "Remarks on a Fragmentary List of Kings of Magadha in a Lokaprajñāpti fragment" *WZKS* 33, 1989, pp. 121-128.
  - 20 ディーツは、この系譜も含め、宇宙再生後から後の第11章の後半が、根本有部破僧事手抄本『サンガバードヴァスツ』(Raniero Gnoli, *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, being the 17th and last section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin Part I*, Roma, 1977, 7-21) に対応しており、手抄本文が回収可能であることも併せて報告している。またチベットの『青史』(『デプテルゴンポ』)にも「世間施設にいわく」と典拠を明らかにしたうえでほぼそのまま引用されている(George Romerich Tr, *The Blue Annals Part I*, The Royal Asiatic Society of Bengal, 1949, pp. 12-13, 13-16)。なお諸王の系譜については、平岡聡「血脈か法脈か—根本有部律破僧事と Mahāvastu とに見る釈尊の系譜—」(『印度哲学仏教学研究』第15号、2000年)も併せて参照されたい。
  - 21 松田和信「梵文断片 Lokaprajñāpti について 高貴寺 玉泉寺 四天王寺 知恩寺貝葉」(『仏教学研究』第14号、1982年)。
  - 22 *Sanskrihandriften aus den Turfanfunden Teil 1~Teil 11, Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Band X-1~X-11*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart, 1965-2012.